所作と伝承

見付天神裸祭における行事構造の解釈をめぐって

谷 部 真 吾

1．はじめに

筆者は、本グローバル COE プログラムにおける自己の研究課題を、次のように設定している。すなわち、それは、祭りで起こった出来事（変化や事件など）を 1 つの「テクスト」として解釈すること、しかもその際、当時の社会状況を「（暗黙の）文化的コンテクスト」として位置づけ、それとの関係性の中で「テクスト」を読み解いていくこと、である。しかし、今回は、これとはやや異なる視座から祭りの分析を試みたい。本稿では、事例として静岡県磐田市で行われる「見付天神裸祭」を取り上げ、この祭りにおける諸行事を分析することで、見付天神裸がいかなる祭りであるのかを明らかにしたいと考えている。つまり本稿では、これまでのように祭りにおける出来事と社会状況との関係を探るのではなく、祭りそのものの分析、やや比喩的にいうならば祭りそれ自体を 1 つの「テクスト」とみなし、その内在的な分析を試みたいと思っている。

ところで、祭りという文化的・宗教的現象についての定義は、これまでに数多くの研究者によってなされてきた。そのような多様な定義の存在は、とりもなおさず、祭りという現象のとらえにくさを示しているといえる。そうした中でいかなる定義を用いるのかは、研究を進めていく上で非常に重要な意味をもつものと思われるが、ここでは上述した本稿の目的に照らして、宗教学者の薗田稔による定義を採用したい。薗田は祭りについて次のように述べている。

> 祭りとは――、劇的構成のもとに祭儀（リチユアル）と祝祭（フエステイビテイ）とが相乗的に出現する非日常的な集団の融即状態（コミユニタス）の位相において、集団の依拠する世界観が実在的（リアル）に表象するものである。そして、その表象された世界像のなかで、集団はその存続の根源的意味を再確認し、成員のエトスが補強される。要すれば、祭りは集団の象徴的な再生の現象

である〔薗田1990：64〕。

一見してわかる通り、この定義には、リーチによってなされた儀礼構造に関する研究やターナーのコミュニタス論が、巧みに盛り込まれている〔リーチ1974、ターナー1976〕。こうした薗田の定義からすると、祭りには3つの特徴があると指摘することができる。それは、第1に、祭りとは劇的構成をもつこと、第2に、祭りの中では集団の依拠する世界観が実在的に表象されること、第3に、集団は祭りによって自らの根源的意味を再確認し、成員のエトスが補強され、集団の象徴的再生が図られること、の3点である。このうち、とりわけ第1・第2の特徴に注目すると、祭りには筋書き（劇的構成）があり、そこでは何らかのモチーフ（集団の依拠する世界観）が表象されているということができよう。以上のようなものとして祭りをとらえた場合、祭りのもつ筋書きやそこで表象されるモチーフを把握することが、祭りを理解する上できわめて重要となってくる。そこで本稿では、見付天神裸祭における諸行事に注目することで、この祭りのもつ筋書きないしはモチーフを抽出してみたい。

2．調査地と祭りの概要

本格的な分析に入る前に、磐田市と裸祭の概要について、簡単に触れておきたい。磐田市は静岡県の西部地方に位置し（図1）、2009年12月末現在の人口は175,346人である[1)]。見付天神裸祭は、磐田市の見付地区に鎮座し、矢奈比売（やなひめ）命と菅原道真を祭神とする矢奈比売神社（通称、見付天神）の例祭である。この祭りは、2000年12月に国の重要無形民俗文化財に指定されている。見付天神裸祭は、かつて旧暦8月10・11日に行われていたが、1961年（昭和36）より旧暦8月10日直前の土・日に開催されるようになった。この祭りには現在28町内が参加しており、各町内は祭りの中で使用される独特な名称（祭組の名称）をもっている（表1）。また、これら28町内は、その地理的位置により4つのグループ（西区、西中区、東中区、東区）に分けられる。現在では、このグループのことを「梯団」と呼ぶ。

なお、先に、この祭りの日程を旧暦8月10日直前の土・日であるとしたが、それはあくまでも大祭の日取りであり、裸祭を構成する諸行事はその1週間前の日曜日から始まる。そうした一連の諸行事は、大きく4つに分けることができる。それは、大祭7日前に行われる「祭事始（さいじはじめ）」、3日前に行われる「浜垢離」、大祭前日に行われる「御池の清祓」、そして大祭当日の4つである。そこで以下では、この4分類にそって、見付天神裸祭の諸行事のうち特に重要と思われるものを取り上げ、やや詳しく説明していくことにする[2)]。

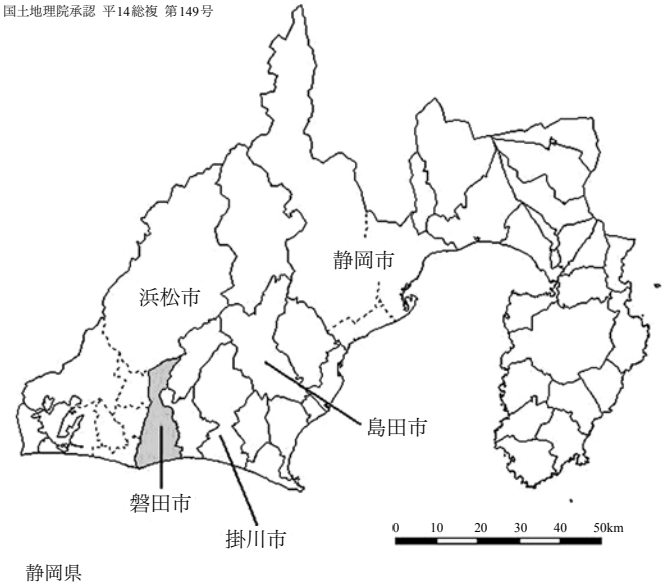

図1　磐田市の位置

＊本図は、kenmap を用いて作成したものである。

表1　見付天神裸祭への参加町内と祭組の名称

区名	町　内	祭組の名称	町　内	祭組の名称
西区	中央町	月松社	加茂川通	元喬車
	河原町	龍　陣	梅屋町	梅　社
	西坂町	根元車	水　掘	水　陣
	一番町	一番觸	幸　町	玄　社
西中区	馬場町	舞　車	元倉町	元藏社
	天王町	天　王	二番町	二番觸
東中区	宿　町	御瀧車	新通町	龍宮社
	清水町	清　水	中川町	川龍社
	地脇町	地　脇	元宮町	元宮社
	緑ヶ丘	緑ヶ丘	北見町	北　見
	美登里町	美登里	今之浦四	大乃浦
	今之浦五	龍王社		
東区	東坂町	眞　車	富士見町	元門車
	権現町	権　現	住吉町	宮　本
	元天神町	元天神		

2-1．祭事始

裸祭に関連した行事の中で、最初に行われる主要行事は祭事始である。祭事始は2つの儀礼からなり、1つは「元宮天神社祭」であり、もう1つは「御斯葉下ろし」である。このうち元宮天神社祭は、大祭1週間前の日曜日のPM 2:40に、見付天神で行われる比較的短い神事から始まる。この神事の後、神職、御先供を始めとする神社関係者は[3]、見付天神から見て北の台地上にある元宮天神社（通称、元天神）へと向かう[4]。その道中、一行は一言もしゃべってはいけないことになっている。元宮天神社に着くとすぐに神事が行われる。以上が元宮天神社祭の一連の流れであるが、本来、この儀礼の中心行事は、その日の夜に行われる御斯葉下ろしで使用される榊を採取することであったという。このことは、元宮天神社祭が、御斯葉下ろしを執行する上で欠くことのできない儀礼であることを意味しており、両者を別々の儀礼としてではなく、相互に結びついた一続きの儀礼として認識すべきであることを示している。

元宮天神社祭の後、PM 10:00から御斯葉下ろしが始まる[5]。御斯葉下ろしとは、見付天神の境内や見付の町中に榊を立てていく行事であり、合計15本の榊を13カ所に立てる（図2）。なお、このとき、境内のみならず見付の表通り（旧東海道）の明かりは、すべて消されることになっている。しかも、この行事を執り行う神職らは、真っ暗闇の中を走って移動することになっている。このような約束事のもとで行われる御斯葉下ろしには、いったいどのような意味があるのだろうか。この点について、『磐田の民俗』

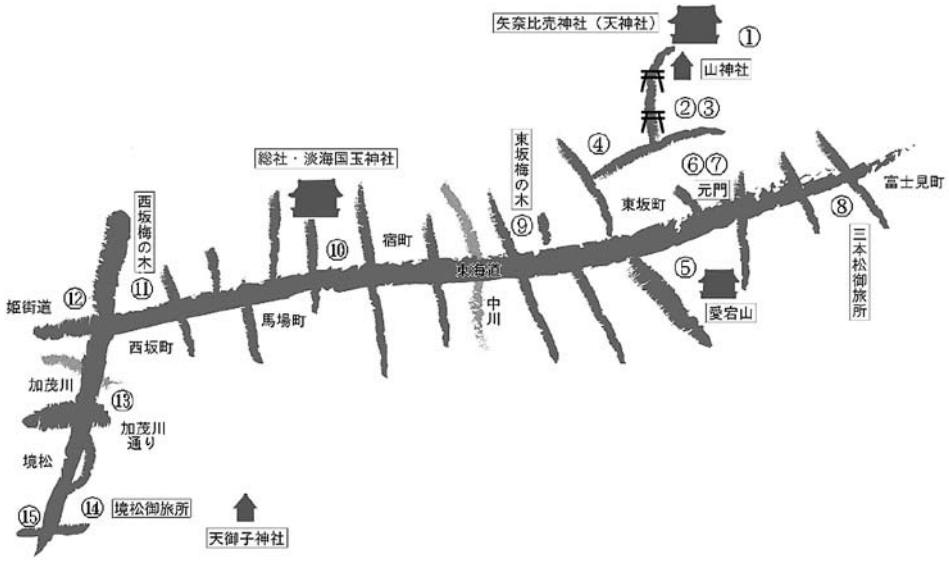

図2　御斯葉下ろしで榊を立てる場所

＊数字は榊を立てる場所と順番を示している。
本図は、磐田市教育委員会文化財課提供の図に加筆したものである。

では、「ミシバオロシは、形としては、元天神社から榊に宿して迎えてきた神霊を秘かに町の要所に建て（ママ）、町中を聖なる場とする行事である」としている〔磐田市民俗調査団（他編）1984：185〕。そうした記述からすると、御斯葉下ろし、さらにはその際に必要となる榊を採取するための儀礼である元宮天神社祭をも含めた祭事始全体の意味として、以下の2つを指摘することができよう。それは、第1に、元宮天神社という台地上に鎮座する神――もっといってしまえば山の神――を榊に宿して見付の町中に招き入れる行事であり、第2に、神の宿る榊を町の要所に立てることによって、町を清め、聖なる空間とするための行事なのである。祭事始にはこのよう意味が込められているため、かつては、この行事が終了してから裸祭が終わるまでの間、不浄を嫌い、葬式を出すことが禁じられ、また月経の女性は隔離されたともいわれている。

2-2．浜垢離

浜垢離は、大祭の3日前に行われる。AM 9:20ごろ、見付天神で短めの神事が行われた後、神職や御先供などの神社関係者らはバスで旧福田町の海岸に向けて出発する。その後、裸祭に参加する各町内も、バスを仕立てて福田の海岸に向かう[6]。海岸に着くと、松林の中で「松原放生会祭」が行われ、次いで砂浜に出て「海浜の修祓」が行われる。これら2つの神事が執行された後に、浜垢離となる。浜垢離では、まず神職が海に入り禊をした後で、御先供、次いで輿番（こしばん）の順で禊を行う[7]。その際、御先供の人々は、荒波に洗われた12個の小石と浜砂、海水を持ち帰る。小石は、大祭当日の神輿出御時に神輿の周囲におかれ、また浜砂と海水は大祭前日に行われる御池の清祓の際に使用される。輿番の禊が終わると、いよいよ各町内の参加者たちの浜垢離となる。彼らは町内ごとにまとまって海へ入り、禊をする（写真1）。このようにして行われる浜垢離の意味は明白である。浜垢離は、明らかに、祭り参加者たちの身を清めるための行事である。あるいはまた、祭事始が山の神を榊に宿して見付の町中に招き入れる行事であったことを想

写真1　各町内の浜垢離の様子

起するならば、小石や砂、海水を持ち帰るこの行事も同じように解釈することができよう。すなわち浜垢離とは、そうした海のものに海の神を乗せて、見付に招き入れる行事でもあるのである。

2-3．御池の清祓

大祭前日になると、御池の清祓と呼ばれる行事が行われる。PM 8:00より、見付天神の境内にある御池の前で神事が行われ、その後、境内の祓いとなる。神職が大麻・塩湯（海水）・砂桶をもって、境内を祓う。初めに拝殿の内部を祓った後、社殿の周囲、参道、街道を歩きながら祓い清めていく。そして見付の表通りに出ると、神職はもっていた大麻を2名の若い御先供に渡す。彼らは手渡された大麻を中川まで走って捨てに行く。こうして境内の祓いが終わると、参列者全員に榊が配られる。参列者は受け取った榊で全身を祓い、最後に息を吹きかけてから、それを庭火にくべる。以上のような儀礼からなる御池の清祓は、神社境内を清めるための行事であるとされている〔磐田市民俗調査団（他編）1984：190〕。

2-4．大祭1日目

大祭初日は、朝から各町内が見付天神に御神酒を献上にやってくる[8)]。AM 10:00になると、見付天神にて例祭が厳かに執り行われる。例祭の中では、小学校高学年の4人の少女による浦安の舞が奉納される。浦安の舞は、この日のPM 4:00にも見付天神にて奉納され、さらに翌日はAM 10:00とPM 2:00に見付天神の西にある淡海国玉神社（通称、総社または中の宮）でも奉納される。やがてPM 4:30になると、見付天神境内の祓所にて「輿番清祓」が行われる。その年の輿番にあたる人々は、白丁に烏帽子という正装で、神職による祓いを受ける。神聖なる神輿を担ぐ人々の祓いは浜垢離だけで終わらず、大祭1日目にも行われる点で、裸祭がどれほど清浄性を重視した祭りであるのかが理解できよう[9)]。

あたりが薄暗くなり始めるPM 6:00、鉢巻きと腰蓑をつけた子どもたちの一行（子供連）が、見付天神を目指して出発する。これに対して、大人たちの一行が見付の表通りに躍り出るのは、PM 9:00である。各町内の裸衆は梯団ごとに集団を作り、西の加茂川橋から東の三本松御旅所の間を、あらかじめ決められた行動予定にしたがって移動する。なお、裸衆の一団の前には、「ダシ」と呼ばれる万灯をもった人々が歩く。ダシは各町内から1つずつ出される。このように、ダシに先導されて、各梯団がひと塊となって通りを移動するさまを「道中練り」と呼ぶ（写真2）。やがて、見付の表通りを練り歩いた梯団は、PM 11:00ごろから順番に見付天神の拝殿に飛び込む。これを「堂入り」という（写真3）。堂入り後は、人々が互いに体をぶつけ合う「鬼踊り」となる（写真4）。

話はやや前後するが、大人の裸衆が見付の表通りに現れ始めるPM 9:00ごろ、見付天

写真 2　道中練り

写真 3　堂入り

写真 4　鬼踊り

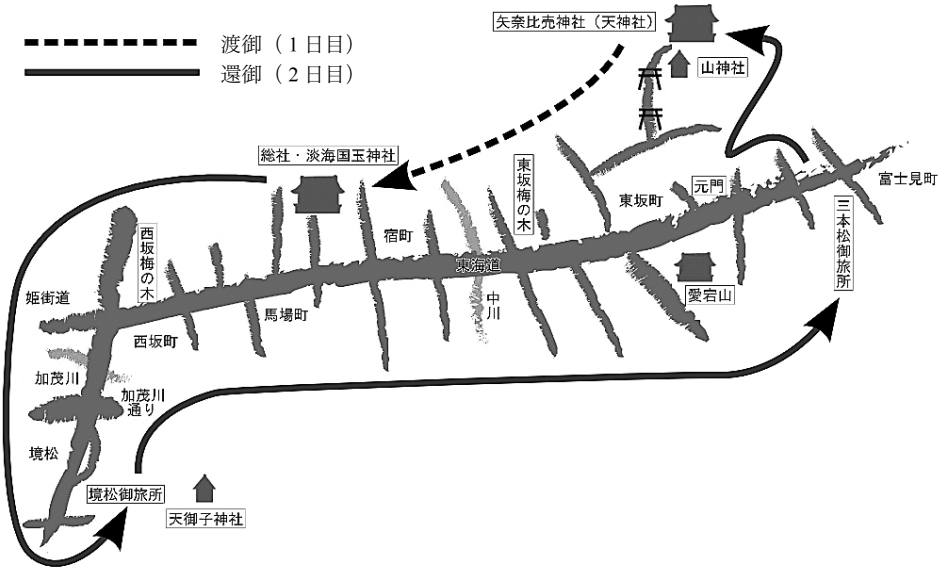

図 3　神輿巡行図

＊本図は、磐田市教育委員会文化財課提供の図に加筆したものである。

神の拝殿では神霊を神輿に移す「御神霊遷御祭」が行われる〔見付天神裸祭手引書編集委員会2003：90–91〕。それからしばらくして、見付天神裸祭に参加する全28町内の堂入りが終わると、拝殿の奥で「渡御奉告祭」が行われる〔同：94–96〕。渡御奉告祭では、まず神輿前に献ぜられていた神饌を撤し、その後、浜垢離の際にとってきた12個の小石が神輿の周りにおかれる。この12個の小石は 1 つずつ半紙で包まれている。各半紙には、子・丑・寅……といった12支の文字が 1 文字ずつ書かれており、それぞれの小石はそれぞれの方向に合わせて神輿の周囲におかれる。渡御奉告祭では、次に献饌が行われる。このとき、「稲穂籠」もしくは「粗目籠」と呼ばれる特殊神饌が献ぜられる。稲穂籠は文字通り竹で編んだかごであり、その中にはかわらけに盛った大豆・小豆・粟などが入れられている。献饌の後、祝詞奏上・玉串奉奠と続き、「八鈴の儀」となる。八鈴の儀とは、天井につるしてある八鈴から延びるひもを引いて、鈴を 7 回・ 5 回・ 3 回と鳴らす儀礼である。尾崎富義によると、この鈴の音は神輿出御の合図となっているという〔尾崎1989：7〕。

八鈴の儀が終わると、御先供は各自が持つべき道具を執り、神職とともに見付天神の境内南側にある山神社へと向かい、そこで神事が行われる（「山神社祭」）。この神事の最中に煙火が打ち上げられるが、これは神社だけでなく、町中の灯りを消すための合図である。街灯や信号機をも含め、見付の町中の灯りがすべて消されると、神輿の出御となる。神輿は、拝殿内で体をぶつけあっている裸衆をかき分けて出てくる。その後、神輿は、暗闇の中を淡海国玉神社に向けて見付の表通りを疾走する（図 3 ）。神輿が淡海

国玉神社に到着すると、馬場町による御神酒献上があり、その後、神輿に神饌などが供えられ、着御祭が行われる〔磐田市民俗調査団(他編) 1984：203、見付天神裸祭手引書編集委員会2003：104〕。見付天神裸祭の初日の行事は、この着御祭をもって終了となる。

以上が裸祭 1 日目の主要行事であるが、こうした行事構成は1961年（昭和36）より現在のような形に整えられた。それまで、道中練りは PM 8：00に始まり、堂入り・鬼踊りは AM 2：00から、また神輿の渡御は AM 4：00ごろから行われていた。そうした1960年までの祭りと現在のそれとを比べてみると、行事の始まる時間に変化が見られるものの、行事内容そのものに関してはほとんど変わっていないとされている[10)]。

2−5．大祭２日目

大祭 2 日目は、PM 2：00に、淡海国玉神社にて神事が行われる（「淡海国玉神社本殿祭」）。その後、PM 4：45から「還御奉告祭」が行われ、それが終わると神輿の還御となる。神輿は、淡海国玉神社を出て境松御旅所（天王御旅所）に向かい、その後、再び見付の町中を通って三本松御旅所に行き、そこで折り返して見付天神へと帰る。途中、西坂町と河原町で御神酒の献上を受け、両町で神事が行われる。また、境松と三本松の御旅所でも神事が執行される。神輿が、氏子域の巡行を終えて本殿の前まで戻ってくると、担ぎ手たちは神輿を何度も激しく上下させる。これを「振り込み」という。ひとしきり振り込みを行うと、担ぎ手たちは再び神輿を肩に乗せ、社殿を右回りに一周し、再度拝殿前にくるとまた振り込みを行う。その後、神輿が拝殿に安置されると、「御神霊移し」次いで「還御後御本殿祭」が執り行われる。それがすむと、当年の見付天神裸祭も終わりとなる。

2−6．文書に見る裸祭

ここまで、現在の見付天神裸祭の主要行事について述べてきた。だが、こうした諸行事は、歴史的にどのくらい変化しているのであろうか。筆者の知る限り、裸祭の様子をある程度知ることのできる最古の記録は、1803年（享和 3 ）に成立した『遠江古蹟圖繪』の中に出てくる記述である。そこには、次のように書かれている。やや長くなるが、関係箇所を引用する。

> 見附宿の天神の社を矢奈比賣天神と云ふ。毎年八月十日祭有り。比佐満里の祭と云ふ。社は宿の北側に有り。宿中入口に梅木有り。神主を斎藤主膳と云ふ。八月七日の夜、荒浜となづく。同十日の夜八つ時御輿渡る。宿中犬・猫・鶏・牛・馬を遠ざく。家々燈火を消し、寝たる者を起し無言なり。見附堺松と云ふ所より若者ども大勢赤褌、身に腰蓑、手に榊の枝を持ちて社壇に走り入りて、元気よくヨンサモンヤサと拍子取りて踊る。鬼踊と云ふ。暫く有りて一番触れとて惣社の方へ触れて行く。

御輿出づる時、社中にて鐘をつく。彼の鬼踊の者ども、輿を舁き上ぐる。鬨の声を揚げて惣社へ走り行き、それより町々燈火を出だしその家の門を見る。輿の道具門に棄てて有れば、その年家に災有りと云ふ。その年、天神の機嫌よければ輿軽く、悪ければ重しと云ふ。六日より白木の板に「比佐満里祭禁　不浄之輩」と書き、町町の角へ建つ。〔藤1991：289–290〕

この記述を見る限り、当時の見付天神の大祭も8月10日に実施されていたことが理解できよう。また、そこで行われていた行事には、若者たちが「社壇に走り入」る堂入りやそれに引き続いての鬼踊り、さらには暗闇の中を行く神輿の渡御などもあったことがわかる[11)]。こうした点からすると、享和年間の裸祭も現在のそれと大差ないのではないかと思われてくるが、しかし、これだけでは行事の全体的な構成が、いまひとつ、はっきりとしない。そこで次に、1823年（文政6）に成立した『事実證談』の記述を見てみることにする。

磐田郡見附駅矢奈比売神社――(中略)――の祭礼は八月十一日なり。其月の七日には氏子残らず浜をりとて海浜へ行身禊し、穢有者（死の穢れ月役のけがれある者なり）は其日より神事終るまでは所縁をもとめ他所にしりぞけ置きて家々を祓ひ清め、十日の夜五ツ時頃より町毎小路々々一組限りダシという物を持ちて、エンヤサモンヤサといひつゝ社の御前に至り、九ツ時過る頃より数十人（この人数定例にて出る者と又立願有て出る者とありて年毎に其数定まらず）裸身に腰蓑をまとひ草鞋のまゝにて拝殿に登り、猶エンヤサモンヤサと言つゝ踊上り踏轟す事半時ばかりなるに、踊る者の汗の気の立事　恰　蒸物の湯気のごとく、其物音方二三十町に響きわたりて、いみじき事にて是を鬼踊といへり。扨月の入を待て凡十町ばかり西なる淡海国玉神社（此社を惣社といえり）に神輿を遷奉るに、其時は往来の人をとゞめ犬猫までも追退け、家々門戸を閉火を滅し物音を禁じ家族のこらずつゝしみうづくまり居るに、闇夜に神輿を舁行事鳥の翔かごとし。此故に比左麻里の祭とも犬追祭ともいへり。かくて還御は十一日昼七ツ時頃、神輿の前後に氏子列りて駅内御行ありて静に御帰座なし奉るなり。〔中村1993：397〕

このように『事実證談』の記述を眺めてみると、祭事始については何も書かれていないものの、大祭3日前の8月7日に浜垢離（「浜をり」）が行われ、大祭は10日の夜から11日にかけて執行されていたことが理解できる。また、大祭の行事については詳しい説明が付されており、それによると、まず「10日の夜五ツ（現在のPM 8:00）」ごろから、裸に腰蓑をつけた人々が掛け声を発しながら神社前へと至る道中練りが行われ、「九ツ（AM 0:00）」過ぎになると草鞋のまま拝殿へと上がる堂入りを行い、鬼踊りとなる。その後、月が沈んでから、暗闇の中を神輿が淡海国玉神社まで渡御している。さら

に、翌11日には「昼七ツ（PM 4:00）」から還御となり、見付の町中を巡行して見付天神に帰ったとされている。『事実證談』に記された、こうした近世後期の裸祭のありようは、1960年までの祭りとほぼ同じであるといっていいように思われ、その意味からすると、現在の祭りと比較しても、行事の開始時間については異なるものの、その構成や内容に関してはほとんど変わりがないと考えてよさそうである。

そのことはまた、1832年（天保３）８月に第七世市川団十郎によって書かれた「遠く見ます」と題された文書からも確認できる〔磐田市史編さん委員会1991：750–754〕。但し、「遠く見ます」の記述を細かく見てみると、特に行事が行われる時間に関して『事実證談』との間に違いが見られる。例えば「遠く見ます」において、道中練りは「くれ六ツ（PM 6:00）」から始まるとされており、また神輿渡御のために家々の明かりを消す合図が「八ツ（AM 2:00）」に出され、さらに翌11日の還御に関して、神輿が見付天神に帰る時間を「日の八ツ時（PM 2:00）」としている。「遠く見ます」の中に見られる、そうした時間の記述が正確であったのか否かについては、今後、検証されなければならないであろう[12)]。しかし、大祭当日の行事構成やその内容に関しては、『事実證談』における記述とさして変わらない。したがって、七世団十郎の手記からしても、近世後期の見付天神裸祭のありようと現在のそれとは、行事の開始時間を別にすれば、そう大きく変わっていないということができるように思われる。

３．見付天神裸祭の解釈をめぐって

以上、見付天神裸祭の主要行事を概観し、その後、それらが近世後期以降ほぼ変化していないことを明らかにしてきたが、ここで改めて、それぞれの行事がどのような意味をもっているのかについて確認しておきたい。まず、大祭７日前に行われる祭事始は、見付の町を清め聖なる空間にするとともに、山の神を招来する行事でもあった。また、大祭３日前に行われる浜垢離は、裸祭参加者を清めるだけでなく、海の神を見付に招来するという意味をも有していた。さらに大祭前日の御池の清祓は、見付天神の境内を清める行事であった。こうした意味をもつ諸行事に対して、大祭当日の行事はどのような意味をもつのであろうか。２日にわたって開催される大祭のうち、２日目の行事の意味は比較的わかりやすい。この日の主な行事は基本的に神輿の巡行である。とするならば、２日目の行事のもつ意味は、氏神を巡行させることによって氏子域に祝福を与えることであると理解することができる。だが１日目の行事、とりわけその中心をなす道中練りや鬼踊りは、何を意味しているのであろうか。

３−１．鬼踊りの起源伝承について

この点について、まずは後者の鬼踊りから考えていこう。鬼踊りに関しては２つの起

源伝承がある。1つは天神勧請伝承である。この伝承について『磐田の民俗』では、『磐田市誌』下巻を引用しながら次のように述べている。

【『磐田市誌』下巻では】元禄3年に人々に回された拝殿弊殿再営奉加牒や元禄15年（1702）2月に行われた「菅公八百年祭行事次第」の中の「一条天皇の正暦4年（993）8月11日、勅を奉じ、京都の北野天神から矢奈比売神社に北野天神（菅原道真）を勧請し、毎年勧請の11日に祭祀の盛礼を修し、氏子は歓喜踰躍の舞をなし、神意を慰める」という記述をひいて、北野天神勧請に際して歓喜踰躍の舞が鬼踊りの起源となっている可能性を示唆している。〔磐田市民俗調査団（他編）1984：173〕（【　】は引用者）

このように『磐田の民俗』は、北野天神を勧請したときの氏子たちの歓喜の舞が、鬼踊りの起源であると指摘しているのである。これに対して、鬼踊りの起源に関するもう1つの伝承は悉平（しっぺい）太郎伝承である。『磐田の民俗』では、歓喜踰躍の舞である鬼踊りを、悉平太郎という名の犬が見付天神に住む怪物を退治した後の、村人たちの喜びの表現であったとする伝承も取り上げている。やや長くなるが、全文を引用する。

「悉平太郎（疾風太郎、早太郎の別称がある）

毎年8月になると、年頃の娘を持つ村の家々では不安な日々を送らねばならなかった。何処からともなく飛んで来て、屋根に白羽の矢が立つと、その家の娘を天神社（今の元天神）へ人身御供として捧げなければならないのだ。たまたま此地を通りかかった六部が、この話を聞き、前夜泊まった天神社で、信濃の悉平太郎をいたく恐れて言う何者かの一人ごとを聞いたことを思い出した。信州秋葉街道を歩き、悉平太郎を上伊那の赤穂村光前寺に探しあてたところ、これが犬であった。さっそく事情を話して来てもらった。8月10日の真夜中、悉平太郎は天神社に人身御供の身代わりとなってさし出された。夜中になると怪物が現われ、悉平太郎と知ると怒り狂ってあばれ回る、争う声や物音は夜明けまで続いた。朝人々が行ってみるとヒヒが死んでおり、悉平太郎の姿は見えなかった。その後悉平太郎は光前寺に帰りつけずに途中の道で死んだ（帰りついたという話もある）。」

このヒヒ退治に喜んで踊った踊りが鬼踊りだといういい伝えである[13)]。〔磐田市民俗調査団（他編）1984：174〕

以上が鬼踊りの起源を語る伝承である。これら2つの伝承は、鬼踊りの起源だけでなく、裸祭のモチーフさえ示しているように思われる。まず天神勧請伝承では、裸祭を993年（正暦4）8月11日に北野天神を勧請したことを記念する祭りであるとしている。

また、悉平太郎伝承からすると、悉平太郎が怪物を退治してくれたことを記念する祭りとして、裸祭をとらえることもできよう。こうした類の伝承は祭りの意味を明らかにしてくれる。このため、これまでの研究では一般に、このような伝承（もしくは神話）と祭りとの密接な関係を指摘する論考が少なからず存在した[14)]。

3-2．起源伝承への疑義

だが、よくよく裸祭の諸行事やそこで見られる参加者たちの所作を眺めてみると、菅原道真や悉平太郎を象徴する要素が見当たらないように思われる。こうした印象は、見付天神の禰宜であった古田清ももっていた。古田は次のようにいう。

> 【天神勧請伝承や悉平太郎伝承については】両方とも話は非常に氏子の方承知しておりますけど、お祭の中ではその姿が出てこない。どういうことかと言いますと、悉平太郎に関する行事が大祭の中にでてこない(ママ)それから、菅原道真公という神様に対するお祭は天神様（矢奈比売様）と同じ時にあげものをして、神様に供えるという行事をするのみであって、祝詞の言葉なども菅原道真公に直接申し上げるような言葉は入っておりません。〔古田1998：25–26〕（【　】は引用者）

また山中共古も、1905年（明治38）6月から1907年5月までの間に書いた『見付次第』の中で、特に悉平太郎伝承に関して「人身御供の伝説は諸国に有るものにて、それがこの裸祭に関係せるものとも思はれず」と指摘している〔遠州常民文化談話会(編) 2000：21〕。この他にも、祭りの行事の中に悉平太郎や人身御供となる女性の姿が見出せないとする指摘は、吉川祐子や六車由美にも見られる〔吉川1983：4、六車2003：244〕。そうした数々の指摘を踏まえると、何の検討もなしに、鬼踊りの起源を天神勧請伝承や悉平太郎伝承に求めることはできなくなる。だが残念なことに、天神勧請伝承については、管見の限り『磐田の民俗』や『磐田市誌』下巻以外にまとまった記述がなく、しかも先に示した引用文の中に出てきた2つの文書、すなわち元禄3年の「拝殿弊殿再営奉加牒」ならびに元禄15年の「菅公八百年祭行事次第」でさえも、現在、その存在を確認することができないのである。このため、天神勧請伝承に関してはしっかりとした検討を行うことができず、この伝承を鬼踊りの起源とすることに対しての疑念は、ますます深まるばかりである。一方、後者の悉平太郎伝承については、近世期に書かれた文書類を見てみると、驚いたことに裸祭とこの伝承との関係がまったく示されていないことに気がつく。例えば、先に引用した『遠江古蹟圖繪』には、以下のように書かれている[15)]。

> 一つの俗説有り、この社に人身御供有り。若き女を献ず。ある人の娘、番に当る。俚人娘を社に献じて帰る。彼女の母、社に忍び見居たれば、夜半の頃、白衣を着せ

表 2　近世文書における記述と現在の悉平太郎伝承との比較

	犬の名前	犬の出身	倒した相手	裸祭との関係
『遠江古蹟圖繪』	弥左衛門	三河国来福寺	古狸	記述なし
「遠く見ます」	しっぺい太郎	丹波の国	としふるたぬき	記述なし
現在の伝承	悉平太郎	信州光前寺	ヒヒ	記述あり

し者来り、彼女を担ひ拍子を取りて曰く、三河国来福寺の弥左衛門にこの事しらせまいぞや、そりやとも云はば、ヤツサツサヤツサツサと云ひて奥へ入る。彼の母不審に思ひ、三州来福寺に尋ね行く。この寺に犬有り、名を弥左衛門と云ふ。すなはち母、この犬を住持に貰ひ、連れて帰りて彼の社へ追ひ入れると、社内にて喰ひ合ふ声す。暫く有りて止み、扉を明けて見れば年経し古狸喰ひ殺されて有りと、専ら児女の囃に云ひ伝ふ〔藤1991：290〕。

また、七世団十郎の手による「遠く見ます」には、悉平太郎の伝承について次のように記されている。

むかし〳〵ぢゝいとばゝアがはなしに、丹波の国のしっぺい太郎にこの事かならずさたするな、どんつく〳〵どんと、おばけがおどっていたを、野宿したろくぶがきいて、人身御供の出るむらへいって、おやたちにくわしくはなし、夫より丹波の国へ行、しっぺい太郎をさがすに、人にあらず、大きな犬をつれて、又そのむらへかへり、人身御供のこしへ入レ、おなじこしへおのれもは入り、山深きやしろへ行キ、夜がふけると、なまぐさきかぜが吹と、かのこしをやぶると、なかよりかのしっぺい太郎が出て、お化とくみ合、ろくぶもかせいして、とふ〳〵しっぺい太郎が勝て、お化をたいじしたという事は、三ッ子もしってはいるが、見るははじめて、この御社にとしふるたぬき住て、人を喰ふわざわいをさりて、草も木もみなあふきみの国とはなりぬ、これもひとへにこの御社の御つげ成るべし〔磐田市史編さん委員会1991：750–751〕

これら 2 つの文章を眺めてみると、明らかに現在の悉平太郎伝承と異なることが理解できよう（表 2）。『遠江古蹟圖繪』では、犬の名前は弥左衛門であり、その出身は三河国来福寺とされ、さらに倒した相手は古狸であった。また「遠く見ます」においては、犬の名前こそ「しっぺい太郎」であったが、出身は丹波の国であり、倒した相手は「としふるたぬき」となっていた[16)]。そうした登場人物たちの設定の違いも気になるところではあるが、ここでもっとも注目すべき点は、双方とも文中に裸祭とこれらの伝承との関係を示唆する記述がまったく見られないことである。このことはやはり、鬼踊りと悉

平太郎伝承との間に、もともと何のつながりもなかったことを示しているのではないだろうか[17)]。

3-3．鬼踊りと道中練りについての解釈

もし、そうした解釈に一定の妥当性があるとするならば、鬼踊りが何を意味する行事であるのかについて、改めて考え直す必要が生じてくる。いったい、鬼踊りは、いかなる行事として理解されるべきなのであろうか。この問題について考えていく際に、手がかりとなるものが2つある。1つは、1898年（明治31）8月10日刊行の『風俗画報』170号に掲載された、神村直三郎による以下の文章である（なお、【　】は引用者）。

> 【鬼踊りでは】裸體に汗を出して肩々と磨し腰々と押しビショ〳〵ヌル〳〵惡感あるも半狂の一連なれば更に構まはず外より冷水を注ぎて其暑熱を助けくるゝを頼みて踊りに餘念なし此踊り十分ならざれは神輿上がらずとなり

ここで留意すべきは、鬼踊りが十分でないと神輿は上がらないとしている点である。この部分は、鬼踊りが神輿の出御と関係のあることを示しているわけであるが、それにしても、なぜこの2つが結びつくのであろうか。その問題を解き明かす鍵となるのが、2つめの手がかりである。それは、神輿が見付天神を出る前に奏上される祝詞の一節であり、そこには「往古乃例乃随尓御氏子乃人等斎清麻波里氏拝殿乃大床母登抒呂尓踏平志歌比響動伎手打鳴志氏」という文言がある〔茂木(編) 1991：284〕。この祝詞の一節からすると、鬼踊りとは、穢れのない氏子が拝殿の大床を「踏平（ふみなら）」すことであると理解することができる[18)]。とすれば、このことは、吉川祐子も指摘しているように、鬼踊りが反閇であることを示唆しているのではないだろうか[19)]〔吉川1983〕。ちなみに反閇とは陰陽道の呪法の1つであり、足踏みをすることによって邪気を祓うという技である。反閇は、神楽などの民俗芸能でも見られるとされている。鬼踊りがそうした反閇であるとするならば、先に引用した神村の文章の中で、鬼踊りが十分でないと神輿が上がらないとされていた理由も明らかとなる。それは、つまり、しっかりと邪霊を祓い鎮めておかなければ、神輿は上がらないのである。

また、このように考えてくると、反閇は何も鬼踊りだけに限られるものではないだろう。道中練りも、反閇として理解することができるように思われる。実際、野本寛一も、「祭に先立って、まず身を浄めた裸の若者たちが氏子の生活圏である西の境から東の境までの間を練り歩くことは、地域の悪霊を反閇によって踏み鎮めることを意味している」としており〔野本2000：169〕、さらに尾崎富義はこうした野本の見解を支持している〔尾崎1989：2〕。このような野本や尾崎の指摘を加味することによって、ようやく見付天神裸祭の筋書きないしはモチーフを明らかにすることができる。要するに、見付天神裸祭

とは、山の神と海の神を見付の町中に招き入れつつ、祭りに関わる人々や空間を何度となく祓い清めた上で、氏神を巡行させ、氏子域に祝福を与える祭りなのである[20)]。

4．まとめにかえて

以上、本稿では、静岡県磐田市の見付地区に鎮座する矢奈比売神社の例祭、見付天神裸祭の諸行事を分析することで、この祭りのもつ筋書きあるいはモチーフの解明を試みてきた。その結果、見付天神裸祭を、直前で述べたようなものとして理解するに至った。だが、この祭りをそのように理解することは、大きな問題を抱え込むことでもある。なぜならば、そうすることで、鬼踊りの起源を語る2つの伝承を祭りから完全に切り離してしまうことになるからである。しかし、すでに指摘したように、祭りを構成する諸行事やそこでの参加者たちの所作を詳しく検討してみると、起源伝承で中心的な役割を果たす菅原道真や悉平太郎を連想させる要素は、ほとんど見当たらなかった。本稿では、こうした点に着目して分析を進めていったことで、上述のような結論に行きついたわけであるが、このように眼前で繰り広げられる行事や所作に注意を払うことは、祭りを解釈する上で、きわめて重要であるように思われる。なぜならば、とかく祭りに潜在する筋書きやモチーフを抽出しようとすると、少なからず伝承に引っ張られて解釈がなされる傾向にあるからである。しかし、少し考えればわかるように、祭りの諸行事を現出させる参加者たちの所作と、そうした所作や行事にまつわる伝承とは、本来別の体系に属するものであり、所作とは行為の体系に、また伝承は言語の体系に属するものである。したがって、別々の体系に属するこれら2つの要素が関係をもつか否かは、必ずしも一義的に決められるものではない[21)]。もちろん、だからといって、両者を完全に切断した状態で分析を行うべきだといっているわけでもない。重要なことは、所作と伝承との関係を扱う場合、それぞれをじっくりと吟味しながら、両者の関係を慎重に探っていくことであろう。伝承に偏重した安易な解釈は戒められるべきである。

（謝辞）

本稿を執筆するにあたり、調査にご協力いただいた多くの方々に、心より御礼申し上げます。とりわけ、調査の手配から研究に対する助言までしてくださった、見付天神裸祭保存会事務局の中山正典氏に深く感謝申し上げます。氏なくして、本稿が構想・執筆されることはありませんでした。

注

1）磐田市の人口に関しては、磐田市役所のHPを参照した。URLは以下の通り。
URL＝http://www.city.iwata.shizuoka.jp/city/07/ci0701.html（2010年1月19日閲覧）
なお、現在の磐田市は、いわゆる「平成の大合併」によって2005年4月1日にかつての磐田市・豊田町・竜洋町・豊岡村・福田町の5市町村が合併したことによって新しく誕生した市である。ち

なみに旧磐田市域の人口は、2009年12月末現在、92,954人である。

2）本稿では、紙幅の都合から、見付天神裸祭を構成するすべての行事を解説することはできない。このため、ここでは、本稿の趣旨との関係で重要と思われる行事についてのみ説明を施している。こうした姿勢が、非常に恣意的であることについては十分理解しているつもりである。なお、この祭りを構成する諸行事の詳しい説明については、見付天神裸祭手引書編集委員会によって編纂された『見付天神裸祭手引書』や、磐田市民俗調査団（他編）による『磐田の民俗』を参照のこと〔見付天神裸祭手引書編集委員会2003、磐田市民俗調査団（他編）1984〕。また、本稿における諸行事の解説は、基本的に筆者が2009年に実施した見付天神裸祭の調査にもとづいているが、適宜、上記の『見付天神裸祭手引書』や『磐田の民俗』をも参照したことを明記しておく。

3）御先供とは、大祭当日に行われる神輿の渡御・還御の際に、幣帛や弓といった種々の道具をもって神輿に随行する人々のことをいう。彼らは、この他に、さまざまな儀礼の準備や神職の補助なども担う。祭りの中で、このように重要な役割を果たす御先供は、基本的に世襲であるとされている。

4）元宮天神社のある場所は、見付天神の旧社地であるともいわれている〔磐田市誌執筆編纂委員会（編）1956：1303〕。

5）御斯葉下ろしは、1961年（昭和36）ころまで、AM 2:00から行われていた〔磐田市民俗調査団（他編）1984：182〕。

6）現在では、神社関係者・各町内とも海岸へはバスで移動するが、1953年（昭和28）まで浜垢離には舟を使い、「中川」と呼ばれる川を下って行ったという〔磐田市民俗調査団（他編）1984：189〕。

7）輿番とは、大祭当日に神輿を担ぐ人々のことをいう。現在、輿番は、権現町と地脇町（正確には地脇町を中心とした東中区五町連合）が隔年交代で務めている〔見付天神裸祭手引書編集委員会2003：22〕。

8）より正確にいうと、御神酒献上に必ず最初にやってくる町内は西坂町であり、彼らは大祭1日目のAM 0:00を回ると見付天神を訪れる。その後は御神酒の献上に順番はなく、各町内は自町内の都合に応じて見付天神にやってくる。だいたいAM 9:00ごろまでには、すべての町内が御神酒献上をすませるという〔見付天神裸祭手引書編集委員会2003：22〕。

9）この他にも、1955年（昭和30）まで、輿番の人々は大祭当日に近くの川や池で水垢離をとったようであり、この行事のことを「川浜（かわはま）」と呼んでいた〔磐田市民俗調査団（他編）1984：194〕。なお、水垢離をとる場所は権現町と地脇町とで異なり、権現町は太田川、地脇町は大穴という池でとっていた。

10）現在の祭りと1960年までのそれとの比較に関して、もう少し詳しく述べると、両者の間には行事の開始時間の他にもちょっとした違いが見られた。現在の祭りでは、道中練りに引き続いて堂入り・鬼踊りが行われるが、1960年までの祭りの場合、PM 8:00から始まる道中練りの後には堂入りを行わず、このときは見付天神まで行き、そこで社殿を一周して町内に帰ったという。当時は、この行事のことを「宵の祭り」と呼んでいた。宵の祭り終了後、氏子たちはしばらく町内で待機し、AM 2:00近くになると再び見付天神に向けて出発し、堂入り・鬼踊りを行った。こちらは「夜中の祭り」と呼ばれていた。このように1960年までの大祭1日目の夜の行事は、宵の祭りと夜中の祭りの2つに分かれていたのであるが、現在ではこうした区分はなく、それら2つを連続して行っているのである。しかし、こうした違いが見られるにせよ、道中練り・堂入り・鬼踊りといった各行事の全体的な流れやそこでの参加者たちの所作に関しては、本文中にも示したように、現在の祭りと1960年までのそれとの間にさほど大きな差はないといわれている。

11）『遠江古蹟圖繪』の記述の中に、「八月七日の夜、荒浜となづく」という一節が出てくるが、この部分は何を意味しているのであろうか。また大祭当日、若者たちは赤褌をしめ、手に榊の枝をもっていたとされているが、本当にこのような姿で祭りに参加していたのであろうか。このような点については、さらなる研究が必要であろう。

12）また、「遠く見ます」の中には、御斯葉下ろしに関するものと思われる記述がある。それによると、御斯葉下ろしは8月7日の夜に行われたことになっているが〔磐田市史編さん委員会1991：751〕、『事実證談』によると8月7日には浜垢離が行われている〔中村1993：397〕。さらに、「遠く見ます」ではダシについても触れられており、そこには当時のダシが「大キサ（幅のことか）」2間半（約4.5m）もしくは3間（約5.4m）、高さ1丈8尺（約5.4m）という巨大なものであっただけでなく、このダシには80〜90人もの人がついていたと書かれている〔磐田市史編さん委員会1991：751−752〕。こうした記述の真偽についても、詳しい検証が必要であろう。

13）こうした話の内容からすると、見付に伝わる悉平太郎伝承は、全国に広く分布している竹箆（しっぺい）太郎伝承のバリエーションの1つといっていいだろう。なお、竹箆太郎伝承の典型的なあらすじについては、大木卓が明らかにしている〔大木1987：206〕。

14）そうした研究の典型として、エリアーデのそれをあげることができる。彼は、「宗教的な祭、祭典の時はすべて神話の過去、〈太初の〉時の聖なる出来事の再現を意味する」と指摘している〔エリアーデ1969：59〕。

15）神谷昌志によると、近世中期から後期にかけて遠江で成立した地誌は全部で11あるという〔神谷1991：2−3〕。このうち見付天神の悉平太郎（あるいは人身御供）伝承について触れたものは、筆者の知る限り、『遠江古蹟圖繪』しかない。

16）七世団十郎がこのような記述を行った理由として、青島常盤は、団十郎が見付天神の悉平太郎伝承を、近世期に歌舞伎や読み物などを通じてよく知られていた竹箆太郎の伝承（物語）と同じだと思い込んだからではないかとしている〔青島2008：51〕。

17）高木敏雄は、見付の人身御供伝承を、後の世（文脈から察するに近世後半か）に創作された伝承であると見ている〔高木1973：56〕。また青島常盤によると、悉平太郎伝承は、1792年（寛政4）に見付天神からこの犬の出身地とされる信州光前寺に大般若経600巻が送付されたことや、1794年に行われた光前寺の大開帳などを契機として、創作されたものだとしている〔青島1994、2008〕。こうした指摘がどこまで正しいのかを検証するための資料が、筆者の手元には不足しているため、ここではこのような指摘があることを記すにとどめたい。

なお、現在、見付で語られている悉平太郎伝承の形成過程を考える上で、興味深い伝承が存在する。赤峯太郎によると、美濃の国の伏見の鎮守社にも人を食べる狒々がおり、その狒々を光前寺の「早太郎」という名の犬が退治したという伝承があるという〔赤峯1913：171〕。赤峯の報告では、この伝承がどこの地方で語られていたものなのかがはっきりとしないため、性急な結論は控えるべきであろう。ただ、見付天神と、おそらく何の関係もない美濃伏見の鎮守社でも、神社に住みついた人を食べる怪物を退治するのに光前寺の犬が活躍したとされていることからすると、この犬が活躍する型の伝承の形成に、信州の人々、とりわけ光前寺やそこの関係者による何らかの関与があったのではないかという気がしないでもない。

18）「踏平」は、その直前の「登抒呂（とどろ）ホ（に）」という語との関係からすると、本来は「踏鳴」と表記されるべきなのかもしれない。しかし、いずれの表記が正しいにせよ、ここで重要なことは――「床が平らになるくらい」もしくは「床から音が出るくらい」――強く床を踏むことであるという点に違いはない。

19）吉川は、見付天神裸祭について、「裸祭りは、咒師芸の乱声と反閇を基本とした鎮魂の乱舞で、悪霊を山車に依り憑かせながら村境まで鎮送する御霊会の芸能である」としている〔吉川1983：13〕。吉川のいう山車とは、道中練りの際に梯団の前を行くダシのことである。こうした吉川の指摘は非常に興味深いものであるが、ダシが悪霊を依り憑かせるための依代であるのか、さらには裸祭が御霊会の芸能であるのかに関しては、さらなる検討が必要であるように思われる。この点については、いずれ稿を改めて論じてみたい。

20）もちろん、ここで明らかにした見付天神裸祭の筋書きもしくはモチーフは、現在とほぼ同じよう

な行事構成・内容をもっていたと思われる近世後期以降、より正確にいうならば、『事実證譚』が成立した1823年（文政６）以降の裸祭についてのみ、あてはまるものである。

21）そのことはまた、裸祭と悉平太郎・人身御供伝承とを関係づけて語るようになったのが、後世の人々の創造力のたまものであることを示唆することにもつながる。管見の限り、見付天神裸祭を人身御供の供えられる祭りとして位置づけようとした最初の文書は、1794年（寛政６）に成立した光前寺縁起の１つ「佛薬證明犬不動霊験物語」である（以下、「佛薬霊験物語」と略述）〔駒ヶ根郷土研究会・光前寺縁起研究委員会(編) 1996〕。この「佛薬霊験物語」によると、見付天神に人身御供を供えるようになったのは、長徳元年（994）の夏の末からであるという。見付の人々は、そのころ、天変地異に見舞われ苦しんでいた。そこへ通りがかった修験者に、見付の長が助けを請うと、修験者は「今年より八月十日を祭祀と定め　齢十歳未満の男子容顔美麗なるを選で牲に備ふべし」といって、どこかへ消えてしまったという〔同：108–109〕。このように「佛薬霊験物語」では、人身御供を供える日を裸祭の大祭当日にあたる８月10日とすることで、この祭りと悉平太郎・人身御供伝承とを結びつけているのである。なお、「佛薬霊験物語」よりも前に成立した「光前寺犬不動霊験記」の末尾に記された「書写　大般若宝経の由来」（成立は1793年〈寛政５〉と思われる）と、「不動尊縁起并本聖上人伝」の末尾にある「大般若経奉納の縁起」（成立は1793年）には、ともに「往古遠州府中に天満宮の廟あり、祭祀に至る毎に里民先ず其の姿貌端正なる者を擇び、柩に盛り之を廟後に置く」という同一の記述が見られる〔同：93、99〕。一見すると、これらも、裸祭を人身御供の供えられる祭りとして描いているように思われるが、よくよく記述を見てみると、ただ「祭祀」とあるだけで、それが裸祭のことを指すのか、それとも人身御供を供えるために行われた、裸祭とはまったく関係のない儀礼を指すのかが判然としない。そのため本稿では、これらの記述を、裸祭と悉平太郎・人身御供伝承とを結びつけた最初のものとして扱わなかった。

また、『光前寺縁起の研究』によると、「佛薬霊験物語」の編者は寺子屋の師匠として活躍した文人、堀川禹洴であり、彼が寺僧から物語を聞いて書写したものがこの文書であるという。さらに、同書では、堀川が光前寺の霊薬である「健中丸」の製造・販売の権利を得ていたため、特にこの薬の宣伝に意を用いて物語を書いていると指摘している〔駒ヶ根郷土研究会・光前寺縁起研究委員会(編) 1996：3〕。確かに、「佛薬霊験物語」には次のような一節がある。

> 遠州国府天満宮の廟に於て怪神の為に人身の牲を供え来り里民を悩まし毎年一度づつ牲を供へしに　この度長太郎の一子牲の難をのがれしは全く霊薬のしるしにて愛子の命助かりしは万金にもかえかたしと人々薬能の尊き事を称し　俗言に誰言ひ初めしとなく子万金丹とぞ唱へれる〔同：115〕

このように「佛薬霊験物語」では、人身御供として供えられた子どもが、その難から逃れることができた理由を「霊薬のしるし」だとしているのである。現在確認しうる限り、裸祭と悉平太郎・人身御供伝承とを最初に関係づけた文書には、こうした一面もあることを理解しておく必要もあるだろう。

ところで、「佛薬霊験物語」の次に裸祭と悉平太郎・人身御供伝承とを結びつけた文献とは、いったい、どのようなものであろうか。『風俗画報』388号（1908年〈明治41〉９月５日刊行）に掲載された淡遠小史という人物による文章や、同405号（1910年２月５日刊行）の後藤秀穂の文章によると、裸祭と悉平太郎・人身御供伝承とを結びつけたものに、『都の錦』という名の小説や『遠江記』または『遠江國調誌』という地誌があるとされている。しかし、青島常盤は、これらの書物は淡遠小史の筆によって書かれたものしか残存しておらず、またその詳しい内容についても彼しか知らないことなどを理由に、これらの書物は淡遠小史が創作した偽書である可能性が高いと指摘している〔青島2008：53〕。このように、偽書の可能性が指摘されているこれらの書物を除外すると、

「佛薬霊験物語」以降、次に裸祭と悉平太郎・人身御供伝承とを関係づけた記述が見られるのは、筆者の知る限り、本文でも取り上げた『風俗画報』170号の神村の文章である（1898年〈明治31〉8月10日刊行）。逆にいうと、「佛薬霊験物語」が書かれてから神村の文章が世に出るまでの104年間で、この2つを結びつけた記述は、現在までのところ確認されていないのである。この間には、少なくとも、『遠江古蹟圖繪』や『事実證談』を含む7冊の地誌が遠江で成立していたし、また「遠く見ます」もこの期間中に書かれていたにもかかわらず、である。なぜ、このような空白期間が生まれたのであろうか。

参考文献

赤峯太郎　1913 「今昔物語の研究」『郷土研究』1–3　pp. 166–172.
青島常盤　1994 「悉平太郎伝説ノート」『磐南文化』20　pp. 74–81.
――――　2008 「見付天神人身御供伝説の変遷」『磐南文化』34　pp. 47–56.
磐田市誌執筆編纂委員会(編)　1956 『磐田市誌』下巻
磐田市史編さん委員会　1991 『磐田市史』史料編 2　近世
磐田市民俗調査団(他編)　1984 『磐田の民俗』
エリアーデ, M.　1969 『聖と俗』風間敏夫(訳)　法政大学出版局
遠州常民文化談話会(編)　2000 『山中共古　見付次第／共古日録抄』パピルス
大木卓　1987 『犬のフォークロア』誠文堂新光社
尾崎富義　1989 「“動”と“静”の祭り」『古典と民俗学』pp. 1–8.
神谷昌志　1991 「『遠江古蹟圖繪』の修訂解説にあたって」藤長庚『遠江古蹟圖繪 全』神谷昌志(修訂) 明文出版社　pp. 2–7.
駒ヶ根郷土研究会・光前寺縁起研究委員会(編)　1996 『光前寺縁起の研究』
薗田稔　1990 『祭りの現象学』弘文堂
高木敏雄　1973 『人身御供論』宝文館出版
ターナー, V.　1976 『儀礼の過程』冨倉光雄(訳)　新思索社
藤長庚　1991 『遠江古蹟圖繪 全』神谷昌志(修訂)　明文出版社
中村乗高　1993 『事実證談』羽衣出版
野本寛一　2000 「矢奈比売神社」谷川健一(編)『日本の神々』10 東海　白水社　pp. 164–176.
古田清　1998 『神職から見た見付天神裸祭』後藤敏完(編)
見付天神裸祭手引書編集委員会(編)　2003 『見付天神裸祭手引書』
茂木栄(編)　1991 『見付天神裸まつり』國學院大學日本文化研究所
六車由美　2003 『神、人を喰う』新曜社
吉川祐子　1983 「矢奈比売神社の信仰と芸能」『静岡県民族学会誌』 6　pp. 1–19.
リーチ, E.　1974 「時間の象徴的表象に関する2つのエッセイ」(青木保・井上兼行訳) 『人類学再考』思索社　pp. 207–231.